

早津崎五反田遺跡

— 第1次発掘調査報告 —

令和5(2023)年3月
久留米市教育委員会

早津崎五反田遺跡

－ 第1次発掘調査報告 －

令和5(2023)年3月
久留米市教育委員会

序

久留米市は、令和2年度に「久留米市文化財保存活用地域計画」を策定し、令和3年7月に国による認定を受けることができました。この計画では、文化財を国県市の指定に関わらず「歴史遺産」として広く捉え、これを将来にわたって「見つけ守り、活かし伝える」方針を定めました。歴史遺産は、私たちの郷土に暮らす人々が古い時代から現代まで積み重ねてきた文化を体現するものです。この貴重な歴史遺産を次世代へ継承するため、本市では継続的な保存・管理を図るとともに、市民が身近な歴史文化にふれ、地域と自己のつながりを認識できる機会を提供することで郷土愛を醸成し、さらには学校・社会教育や地域振興、観光振興など、久留米の新たな魅力の創出につながる歴史文化のまちづくりを進めています。

本書で報告する早津崎五反田遺跡も大切な歴史遺産の一つで、宅地造成に先立つ発掘調査として、令和3年度に実施したものです。発掘調査では縄文時代から平安時代までの遺構と遺物が出土し、貴重な成果を挙げることができました。

今回の発掘調査とその成果を収録した本書の発行によって、地域の歴史解明、さらに文化財保護の理解や普及等に多少なりとも貢献すると同時に、なにより本市の魅力の創出につながれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査・本書の発行に際しまして、多大なご理解のもとにご協力を頂きました関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

令和5年3月31日

久留米市教育委員会
教育長 井上 謙介

例 言

1. 本書は、宅地造成に先立ち、ワウ九州ホールディングス株式会社の委託を受けて実施した早津崎五反田遺跡第1次調査の発掘調査報告書である。
2. 本調査は久留米市教育委員会が主体となり、久留米市市民文化財保護課の江頭俊介が担当した。
3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、江頭が行った。また、遺物の実測は、当課の廣木誠・小川原励、会計年度任用職員の宮崎彩香・今村理恵・江口里織・山元博子が行い、浄書は廣木・宮崎・今村・山元・横井理絵が実施した。なお、遺構実測図のうち、石蓋土壇墓実測図、甕棺墓実測図、遺物出土状況図および土層図は江頭が写真測量を行い、その他の図面は廣木が株式会社CUBIC製ソフト「遺構くんcubic」で作成した。
4. 本書に掲載した遺構写真は江頭がCanon EOS 6Dを使用し撮影した。全景写真は有限会社空中写真企画に委託し撮影した。また、遺物写真は廣木がPENTAX K-1 Mark IIを用いて撮影した。なお、本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
5. 本書に使用した遺構の略記号は、SD - 溝、SK - 土坑、ST - 墳墓を示す。
6. 遺構実測図は国土調査法第Ⅱ座標系（世界測地系）を基に作成し、図面方位は座標北を示す。なお、平成28年に発生した熊本地震に係るパラメータ補正は行っていない。
7. 本調査の略記号はHZG - 001、調査番号は202113である。
8. 遺物観察表の凡例は下記のとおりである。

口径（長）・底径（幅）・器高（厚）の単位はcmである。（ ）内の数値は現存値を、[]内の数値は復元値を示す。

色調は『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社 1997年版）による。

胎土は0.5mm未満を微砂粒、1mm未満を細砂粒、2mm未満を粗砂粒、5mm未満を細礫、5mm以上を礫とした。

登録番号は、久留米市市民文化財保護課が定める出土遺物の登録番号である。

(例) 202113 - 000001
調査番号 登録番号
9. 本調査に関わる遺物・記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。
10. 本書の執筆・編集は、廣木が行った。

本文目次

I. はじめに	1
i. 調査に至る経緯	1
ii. 調査・報告書作成に係わる体制	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の記録	4
i. 調査の目的と経過	4
ii. 検出遺構	4
iii. 出土遺物	17
IV. 総括	29
報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図 調査地点と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)	2
第2図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500)	3
第3図 早津崎五反田遺跡第1次調査遺構配置図 (1/200)	折込
第4図 SD4・36・42実測図 (SD4:1/60、その他:1/40)	6
第5図 SK1・3・21・30・46・53実測図 (1/40)	7
第6図 SK54・55・56・57・58実測図 (SK58:1/60、その他:1/40)	9
第7図 SK65・76実測図 (1/40)	10
第8図 ST44・45・52実測図 (1/40)	11
第9図 ST66実測図 (1/30)	13
第10図 ST47・48・49・50実測図 (1/20)	14
第11図 ST51・67・72・74・75実測図 (1/20)	16
第12図 SD4・42出土遺物実測図 (15・16・17:1/2、その他:1/4)	18
第13図 SK1・3・21・30・46・53・54出土遺物実測図 (1/4)	19
第14図 SK57出土遺物実測図 (1/4)	20
第15図 SK57・58出土遺物実測図 (58・59:1/8、その他:1/4)	21
第16図 SK58出土遺物実測図 (1/4)	22
第17図 SK58・65、ST45出土遺物実測図 (71~76、83~95:1/2、その他:1/4)	23
第18図 ST47~49出土遺物実測図 (1/8)	24
第19図 ST50・51・67・72出土遺物実測図 (1/8)	25

表 目 次

第 1 表	出土遺物観察表①	26
第 2 表	出土遺物観察表②	27
第 3 表	出土遺物観察表③	28
第 4 表	出土遺物観察表④	29
第 5 表	弥生時代墳墓一覧表	30

図 版 目 次

図版 1 (1)	調査地より高三瀬地区を望む(東上空から)	図版 5 (1)	S T 47 甕棺検出状況 (西から)
(2)	東区全景 (北東上空から)	(2)	S T 48・49 甕棺検出状況 (南東から)
図版 2 (1)	西区全景 (南東上空から)	(3)	S T 49 石棺検出状況 (南から)
(2)	S D 4 稜群検出状況 (北から)	(4)	S T 50・67 甕棺検出状況 (東から)
(3)	S D 4 完掘状況 (北から)	(5)	S T 51 甕棺検出状況 (北西から)
(4)	S D 36 完掘状況 (南東から)	(6)	S T 72 甕棺検出状況 (北西から)
(5)	S D 42 完掘状況 (南から)	(7)	S T 74 甕棺検出状況 (北西から)
図版 3 (1)	S K 1 完掘状況 (南西から)	(8)	S T 75 甕棺検出状況 (南東から)
(2)	S K 46 完掘状況 (南東から)	図版 6	出土遺物①
(3)	S K 53 完掘状況 (北東から)	図版 7	出土遺物②
(4)	S K 54 完掘状況 (北から)	図版 8	出土遺物③
(5)	S K 57 遺物出土状況 (南西から)	図版 9	出土遺物④
(6)	S K 57 完掘状況 (東から)	図版 10	出土遺物⑤
(7)	S K 58 遺物出土状況 (東から)	図版 11	出土遺物⑥
(8)	S K 58 完掘状況 (北から)	図版 12	出土遺物⑦
図版 4 (1)	S K 76 完掘状況 (北から)	図版 13	出土遺物⑧
(2)	S T 44 完掘状況 (南から)	図版 14	出土遺物⑨
(3)	S T 52 完掘状況 (北から)	図版 15	出土遺物⑩
(4)	S T 45 遺物出土状況 (北西から)	図版 16	出土遺物⑪
(5)	S T 45 完掘状況 (南西から)		
(6)	S T 66 石蓋検出状況 (北東から)		
(7)	S T 66 完掘状況 (南東から)		
(8)	S T 66 赤色物検出状況 (東から)		

I. はじめに

i. 調査に至る経緯

本調査は、宅地造成に先立つ調査である。令和3年3月22日、土地所有者より久留米市三潞町早津崎字五反田1006番1、1008番、1009番、1010番2における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。一帯は周知の遺跡である早津崎五反田遺跡に含まれ、弥生時代以降の遺構が展開していることが想定されたため、令和3年6月10日に確認調査を行った。結果、溝・土坑等の遺構を確認し、発掘調査が必要である旨を回答した。その後、協議を重ね、調査費用を原因者負担とすること、発掘調査を令和3年度、報告書作成を令和4年度に実施することで合意に至った。協議結果を受け、令和3年9月14日にワウ九州ホールディングス株式会社から「発掘調査の依頼」が提出され、文化財保護法による諸手続きを済ませた後、令和3年10月26日に依頼者と久留米市は「早津崎五反田遺跡における埋蔵文化財に関する協定書」および「令和3年度埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を取り交わした。調査期間は、令和3年11月1日から令和4年1月17日までである。また、出土品整理・報告書作成作業は令和4年5月31日に「埋蔵文化財発掘調査報告書作成業務委託契約書」を取り交わし、実施した。報告書作成期間は令和4年6月1日から令和5年3月31日までである。

ii. 調査・報告書作成に係わる体制

調査委託：ワウ九州ホールディングス株式会社	代表取締役 寺園 公教
調査主体：久留米市教育委員会	教育長：井上 謙介
調査総括：市民文化部	部長：竹村 政高
	次長：深堀 尚子
文化財保護課	課長：水島 秀雄
	課長補佐：久保田 由美（令和3年度）
	田中 健二（令和4年度）
	主査：水原 道範（令和3年度）
	小澤 太郎（令和4年度）
	事務主査：小澤 太郎（令和3年度）
	江島 伸彦
	調査担当：江頭 俊介
	整理担当：廣木 誠、宮崎 彩香、今村 理恵

会計年度任用職員

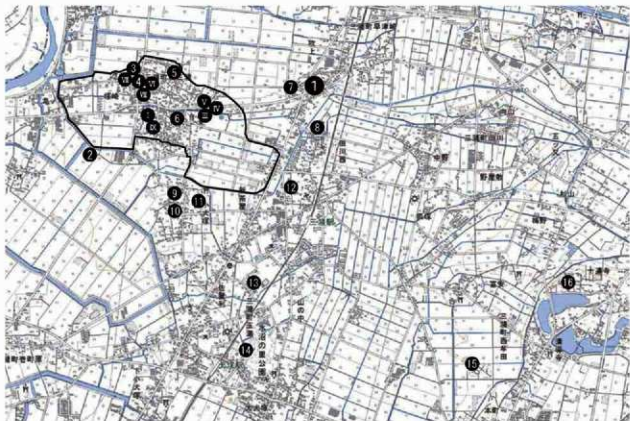
発掘調査 秋永 絹子、岩橋 彦左衛門、太江田 博子、川島 絵津子、川原 初美、黒岩 秀則
 小林 伸一郎、高崎 佳枝、田中 とし子、中村 麻衣、永田 徹、廣田 淳、松尾 朱美
 松本 金一、箕浦 イルマ・グラシエラ 佳子、溝口 輝男、山崎 秀雄（令和3年度）
 整理作業 梶島 かおり（令和3年度）田中 千佐子、山口 久美子（令和4年度）

II. 位置と環境

久留米市は九州の北部、福岡県のほぼ中央に位置する。東西32km、南北16kmの東西に長い市域で、九州一の大河筑後川の中・下流域に沿うように広がる。早津崎五反田遺跡が所在する三潁町は、市域の南西部、筑後川左岸にあたる。三潁町の北西は筑後川を境とし、対岸は佐賀県三養基郡みやき町に、北東は久留米市大善寺町に、南は筑後市ならびに大木町に、西は久留米市城島町に接する。

三潁町の北部を広川が、南部を山ノ井川が西流して筑後川に合流し、町域の東部には八女丘陵から西に派生した標高20m程度の西牟田丘陵を有す。これらの丘陵と河川に抱かれた町域中央部から西部にかけては沖積地が広がるとともに、微高地が点在している。本遺跡は町域の中央部に南北にのびる微高地上に立地しており、標高約9mを測る。

三潁町の遺跡の分布については、平成15・16年度に遺跡等詳細分布調査を行い、集落17、円墳20(消滅含む。)、館跡2、城跡4、墓地2、土塁1、散布地66等が把握されている。これらの大半は沖積地内の微高地とその周囲および西牟田丘陵上に立地し、現在の居住域とも重複することから、現代までの生活が脈々と継承されてきたといえる。近年、町内における発掘調査の事例が増加し、弥生時代を中心に目覚ましい成果を挙げており、以下、発掘調査の成果を中心に概観する。



1. 早津崎五反田遺跡第1次調査地
2. 高三潁遺跡群 (ローマ数字は調査回数)
3. 御廟塚貝塚
4. 塚崎東畑遺跡
5. 烏帽子塚
6. 横溝氏館跡
7. ベキ遺跡
8. 田川館跡
9. 玉満向エ野古墳群
10. 裏畑古墳
11. 犬塚城跡
12. 田川中原遺跡
13. 道手牟田遺跡
14. 玉満松木ノ遺跡
15. 西牟田清導寺浦遺跡
16. 十連寺古墳

第1図 調査地点と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

町内で人々の活動痕跡が認められるのは、縄文時代からである。高三瀧遺跡（第7次調査）では弥生時代の遺構に混入した曾畑式土器が出土し、市内西部で初めて確認された。遺構としては、道手牟田遺跡、田川中原遺跡および西牟田清導寺浦遺跡において落とし穴遺構が検出されている。

続く弥生時代の遺構・遺物は広い範囲で確認されており、特に高三瀧遺跡は北部九州の後期初頭の標識土器「高三瀧式土器」の名称の由来として著名である。同遺跡の集落に関する遺構は、前期末以降の断面V字形を呈する溝や（第6次調査）、擬朝鮮系無文土器を含む中期初頭の堅穴建物や溝が確認された（第7・8次調査）。また、礎板を伴う後期以降の掘立柱建物（第3次調査）も検出された。墓地に関しては、大量の朱とガラス製の連玉および小玉が出土した後期前半の甕棺墓が注目される（第5次調査）。その他の特殊遺物には、後期前半と考えられる幅4m以上の溝から多量の土器・木製品とともに小銅鐸が出土した（第4次調査）。

高三瀧遺跡群の北端に位置する烏帽子塚付近では銅剣2点が、西部に位置する塚崎東畑遺跡では前期末から中期初頭の堅穴建物、中期前半から中頃の甕棺墓が出土した。自然堤防の最高位付近に位置する御廟塚貝塚は、矢野一貞の『筑後将士軍談』の中で墳墓の存在が示され、箱式石棺の棺外に銅剣2点が副葬されていたことを伝える。また、現在でもカキ殻などが散乱する貝塚でもある。

高三瀧地区から目を転じると、本遺跡に西接するベキ遺跡では中期から後期初頭の堅穴建物が、西牟田清導寺浦遺跡では松菊里型住居2棟を含む堅穴建物7棟が検出されている。この他、玉満松木ノ遺跡では朝鮮系無文土器が出土した大型の井戸が確認された。

古墳時代になると、西牟田丘陵沿いに多くの古墳が造営されたようであるが、現在、円墳と推定される十連寺古墳が残る。本遺跡付近では、玉満地区に裏畑古墳が所在するとともに、玉満向工野古墳群では円墳2基が確認され、周溝の一部や馬具が出土しており5世紀後半に比定される。この古墳の造営集団として注目されるのが玉満松木ノ遺跡で、5世紀代の堅穴建物が確認された。

古代の遺構は未検出であるが、中世については高三瀧遺跡（第1・5・9次調査）、ベキ遺跡、田川中原遺跡において井戸・溝・土坑等が確認されている。城館跡に関しては、本遺跡の南方に『筑後将士軍談』で「田川村館跡」として伝えられる田川館が所在するほか、この館の西方、小犬塚天満宮境内一帯には陣掘と伝わる水路が遺存し、150mの方形区画が想定できる犬塚城が残る。また、三瀧庄高三瀧村に地頭職として赴任した、横溝氏の屋敷跡の推定地が高三瀧遺跡群中央部に位置している。



第2図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500)

III. 調査の記録

i. 調査の目的と経過

早津崎五反田遺跡は三瀨町のほぼ中央に位置する標高8～9m程度の微高地上に営まれた遺跡で、調査地は遺跡の中央南端に位置する。遺跡の内容については、平成15・16年度に実施した遺跡等詳細分布調査で散布地として把握・周知されて以降、試掘確認調査において弥生時代の丹塗土器片を含む土坑を確認しており、祭祀土坑や甕棺墓が埋蔵されていることが期待された。

近隣では、調査事例は少ないものの、本調査地の西側100m程度に位置する早津崎遺跡内のベキ遺跡において昭和63年に調査が実施されている。同遺跡では、弥生時代の竪穴建物・溝・土壇、奈良時代以降の掘立柱建物、鎌倉時代の溝・土坑が検出された。中でも弥生時代後期前葉の竪穴建物は、円形を呈する溝の内側に建物を配する稀有な設営方法を採用しており、注目される。

これらのことから、本調査地には弥生時代の遺構をはじめ、古代・中世の遺構が展開することが予想され、遺構の分布状況を確認することを目的として調査を実施した。

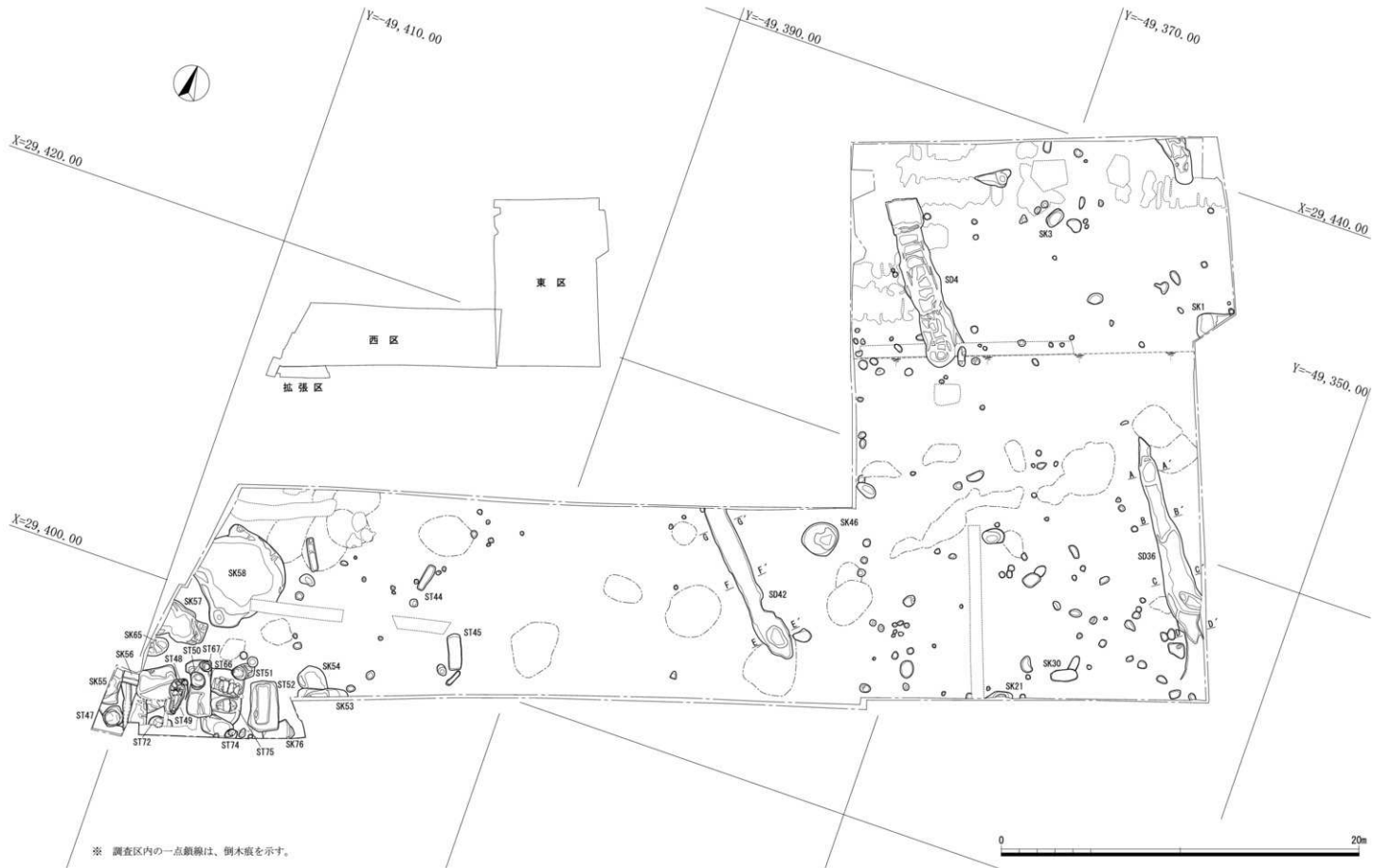
現地調査は令和3年11月1日に対象地内の草刈りから着手した。草刈り後の11月4日に重機を搬入し、東区の表土剥ぎを開始した。11月9日に作業員を投入して遺構検出を行い、15日より遺構掘削を開始した。実測作業、写真撮影は随時行い、12月1日に東区的全景写真を撮影した。撮影後東区検出遺構の補足調査を行うとともに埋め戻しに着手した。12月6日に東区の埋め戻しを終了し、翌日に西区の表土剥ぎに取りかかった。12月9日から遺構検出を行い、翌10日より甕棺墓の検出を開始する。12月15日に西区的全景写真を撮影した後、甕棺墓の写真測量等を実施し、並行して西区の一部埋め戻しを行う。年が明けて1月7日、甕棺墓群の南側へ調査区を拡張し、16日拡張区の調査を完了した。1月17日には埋め戻しおよび機材を撤収し、全ての現地作業を終了した。

ii. 検出遺構

調査区は、廃土置き場等を確保する必要があったことから、東と西の2区に分け、調査を行った。また、西区南西端で検出した墳墓の全容を確認することを意図し、調査区の一部を拡張している。なお、遺構番号については通し番号とした。

調査地は、北東から南西へ「く」字状に延びる微高地上の北西端部に位置する。標高は9m前後を図り、周辺地形より一段高く、北側と西側200mには低地が広がる。現況は畑地で、東区の南半および西区は造成により削平を受け、特に拡張区はその影響が著しい。基本層序は、東区と西区の北側が耕作土直下で遺構検出面に至る。一方、各区南側は耕作土下位に床土と間層（灰色土）が認められ、間層下位で遺構検出面に達する。遺構検出面である地山は暗褐色もしくはにぶい橙色を呈し、前者より後者の方が削平の影響が大きい範囲である。遺構検出面までの深さは30～40cmで、西区南西が50cmを測る。その標高は、東区北側が9.3～9.5m、東区南側と西区が8.5m前後であった。

主要遺構は、溝3条、土坑13基、土壇墓2基、木棺墓1基、石蓋土壇墓1基、甕棺墓9基を検出した。以下、各遺構について詳述する。



第3図 早津崎五反田遺跡第1次調査遺構配置図 (1/200)

溝

SD4 (第4図, 図版2)

東区北西で検出した。長軸方位はN-32°-Wで、長さ9.6m、幅1.4～2.2mを測る。深さは、a-a'間が35cm、b-b'間が60cm、c-c'間が62cmであり、概ね北から南にかけて比高を減じるが、凹凸が著しい。断面形は、a-a'間が凸レンズ状の底面から壁面が立ち上がるのに対し、b-b'間は凹レンズ状の底面を呈する。他方、c-c'間は略U字状であった。

溝内北部では片岩製の礫が多量に出土した。大半の石材は原位置を留めていないと考えられるが、北壁および東壁に石材を立て壁面に沿うように配置した状況が看取され、a-a'間の断面形から推定すると西壁沿いにも石材が立てられていた可能性がある。また、埋土内からは混入した弥生土器のほか、土師器蓋・坏・高台・甕、須恵器蓋・坏・高台付坏・甕・壺、鉄製刀子・釘が出土している。

SD36 (第3・4図, 図版2)

東区南東で検出した溝で、長軸方位はN-34°-Wである。南東端は調査区外に及び、南西端は削平の影響により途切れる。長さは13.7mで、幅は断面図に示した箇所ですら0.8～1.7mを測る。深さはD-D'間で11cm、その他は30～34cmを計測し、北へ向かって緩傾斜を成す。断面形は凹レンズ状の底面から外傾しながら立ち上がる。埋土内からは土師器坏・甕、須恵器甕のほか、弥生土器・黒曜石剥片が出土した。

SD42 (第3・4図, 図版2)

西区東で検出した。遺構の北側が調査区外に及ぶが、長さ9.4m分を確認できた。長軸方位はN-46°-Wを示す。幅は断面図に示した部分で1.0～1.6mを測り、深さは23～26cmである。溝底はフラットであるが、南端の一部が土坑状に10cm程度深くなっている。断面形は、概ね逆台形を成すが、南側は土坑状の窪みの影響で東西両側が一段高い。埋土内からは土師器坏・甕、須恵器蓋・坏・甕・壺が出土した。

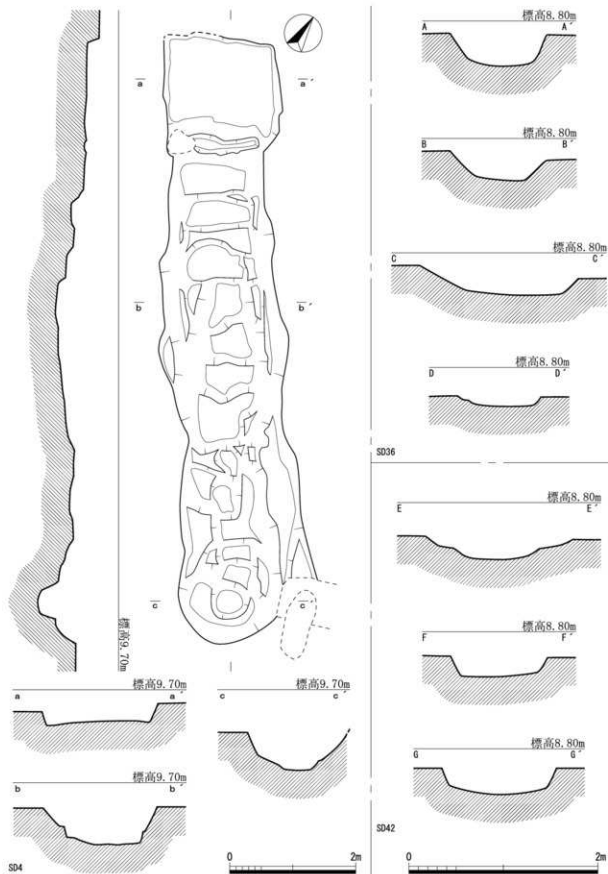
土坑

SK1 (第5図, 図版3)

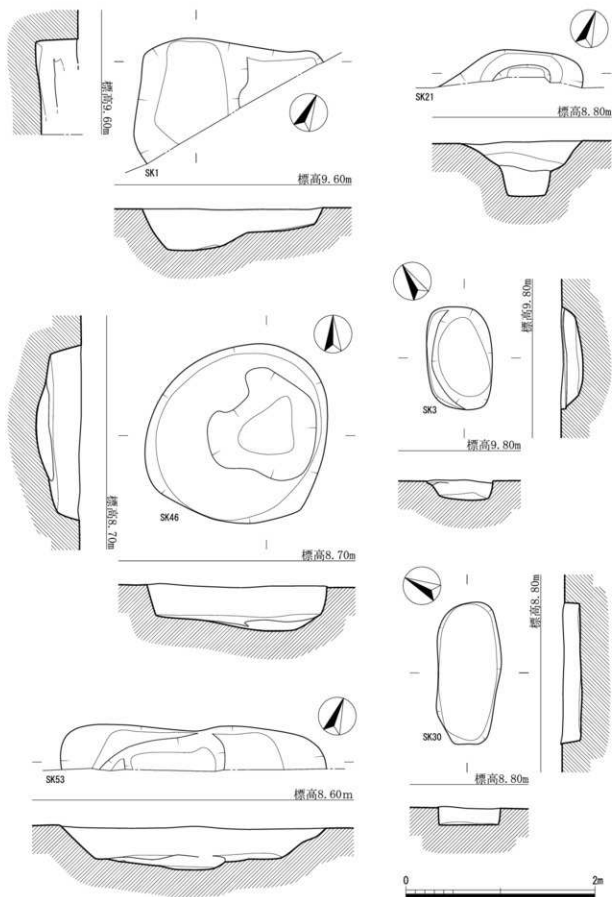
東区北東で検出した。一部調査区外に延びる。平面形は東西方向に長い隅丸長方形と考えられ、長軸長1.91m以上、短軸長1.20m以上を測る。一方、底面の平面形は南北に長く、長軸長1.09m以上、短軸長0.77mである。底面東側にはテラスを有す。深さは、底面まで44cm、テラスまで23cmである。埋土内からは弥生土器甕・壺・鉢・器台が出土した。

SK3 (第5図)

SK1の10m北西で検出した。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸長1.08m、短軸長0.69mを測る。底面の平面形は倒卵形を呈し、長軸長0.84m、短軸長0.51mである。底面までの深さは20cmで、底面中央が僅かに窪む。西壁沿いには幅5～10cmの狭小なステップを有している。埋土内からは弥生土器の甕片2点および須恵器の高台付坏片1点が出土したのみである。



第4図 SD4・36・42実測図 (SD4: 1/60, その他: 1/40)



第5図 SK1・3・21・30・46・53実測図 (1/40)

SK21 (第5図)

東区南端の中央付近で検出した。遺構の南側は調査区外に及ぶため、平面形は不明である。検出規模は東西長1.53m、南北長0.30mで、深さ58cmを測る。底面は水平で、壁面は約30cm直に立ち上がったあと、大きく外傾して上端に至る。埋土内からは弥生土器甕・壺・器台が出土した。

SK30 (第5図)

SK21の3m北東で検出した。平面形は小判形を呈する土坑で、規模は長軸長1.49m、短軸長0.65m、深さ20cmを測る。底面は長軸長1.45m、短軸長0.61mで、断面形は凹形である。埋土内からは弥生土器の甕片が7点出土した。

SK46 (第5図, 図版3)

西区北東で検出した。平面形は楕円形で、直径は1.84～2.02mを測る。坑内東側は一段低く、上段までの深さは30～35cm、下段最深部までは48cmである。底面の断面形は凹レンズ状を成し、壁面は底面から上段を経て、やや外傾したのち上端に達する。埋土内からは弥生土器甕・壺・高坏・器台および黒曜石剥片が出土した。

SK53 (第5図, 図版3)

西区南西で検出した。SK54に先出する。南半は調査区外に及ぶが、平面形は東西に長い長円形と推定される。規模は、長軸長2.80m、短軸長0.42m、深さ46cmを測る。坑内中央に底面を有し、その西側に狭小なステップを2段、東側に広大なステップを1段設ける。断面形は略逆台形を呈する。埋土内からは弥生土器甕・高坏が出土した。

SK54 (第6図, 図版3)

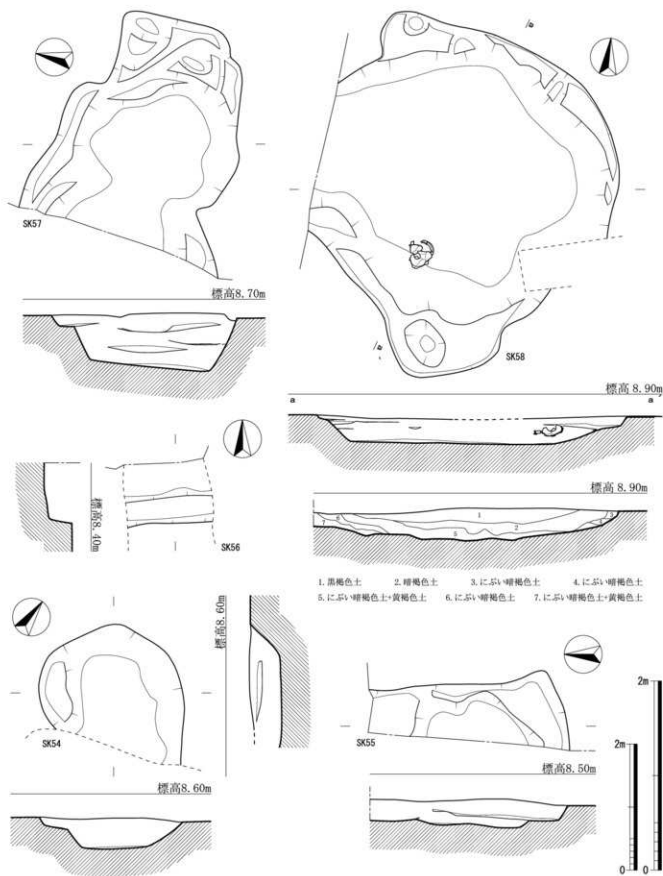
SK53の北側で検出し、これに後出する。平面形は倒卵形と推定され、規模は長軸長1.51m以上、短軸長1.52m、深さ34cmである。坑内南西側には底面より20cm上位にステップを有す。底面の断面形はほぼ水平で、壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。埋土内からは弥生土器甕・高坏が出土した。

SK55 (第6図)

西区南西で検出した。SK56に後出する。大部分が調査区外に及ぶため平面形は不明であるが、検出規模は、東西長0.81m以上、南北長2.11m以上を測り、深さは最深部で30cmである。底面の断面形は波板状で、北側の7cm上位と南側の7～17cm上位にステップが認められた。埋土内からは弥生土器の甕細片が6点出土したが、SK56との関係から判断して混入したものと考えられる。

SK56 (第6図)

SK55の東側で検出し、これに先出する。他の遺構と重複することや、北側が調査区外に及ぶことから、全容は不明であるが、検出規模は東西長0.92m、南北長0.64mである。底面までの深さは30cmを測り、南側は僅かに高くなっている。壁面はほぼ直に立ち上がり、上端に至る。埋土内からは混入した弥生土器甕・高坏のほか、須恵器甕が出土した。いずれも細片であり、図示できなかった。



第6図 SK54・55・56・57・58 実測図 (SK58: 1/60、その他: 1/40)

SK57 (第6図, 図版3)

SK55の北東8mで検出した。西側が調査区外に至る。平面形は不整形で、検出規模は東西長2.43m、南北長2.23mを測る。深さは北側が47cm、南側が61cmであり、床面は南へ傾斜する。断面形は逆台形を成し、北側に2段、南側に1段のステップが認められた。また、東側にピット状の掘り込みを2箇所確認した。埋土に差異は認められず同一遺構として掘削したが、ピットが重複している可能性もある。埋土内からは坑内中央付近、南北方向に集中して多量の弥生土器が出土した。殆どの遺物が床面から30～40cm浮いた状態であり、祭祀行為に関わるものと推定される。

SK58 (第6図, 図版3)

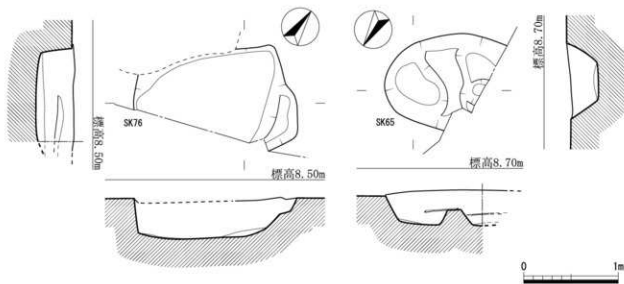
SK57の北東1mで検出した。西側が調査区外に及ぶ。平面形は南北に長い不整形で、検出規模は東西長4.70m、南北長5.58mを測る。一方、下端は東西に長く、東西長4.14m、南北長3.30mである。深さは最深部で50cmを計測する。埋土は、最上位に黒褐色土が、その下位に暗褐色系の土壌が堆積し、一部にブロック土を含む。埋土内からは多量の弥生土器甕・壺・鉢・高坏・甕棺片、黒曜石製石鏃、刀子、板状鉄斧が出土した。

SK65 (第7図)

SK57の南1mで検出した。西側が調査区外に至るが、平面形は長円形と推定され、検出規模は長軸長1.30m、短軸長1.03mである。坑内中央に設けられたステップの東西両側に下端が認められ、深さは35cm程度である。埋土内からは弥生土器甕・壺・鉢が出土した。

SK76 (第7図, 図版4)

拡張区の東で検出した。ST52と重複し、これに先出する。また、南側が調査区外に及んでいる。平面形は長方形と推定され、長軸長1.63m、短軸長1.11m、深さ40cmを測る。底面はほぼ水平であり、坑内東側には幅5～15cm程度のステップを有す。壁面は、東側が緩やかに立ち上がるのに対して、その他はほぼ垂直に立ち上がる。埋土内からは弥生土器の甕片2点が出土したのみである。



第7図 SK65・76実測図 (1/40)

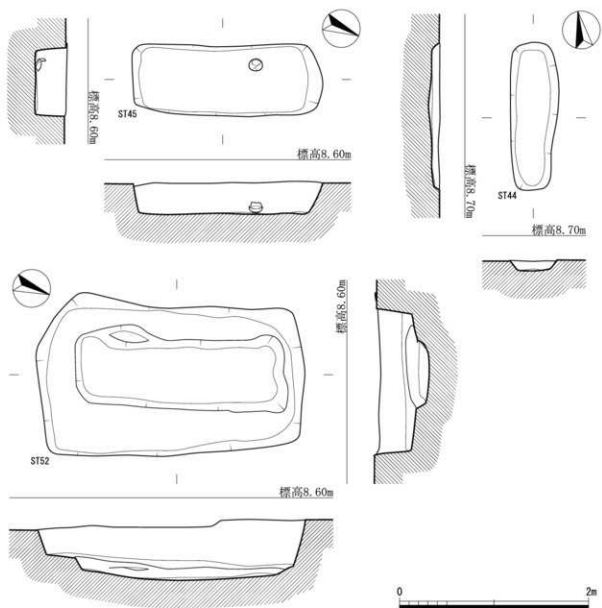
土墳墓

ST44 (第8図, 図版4)

西区中央付近で検出した土墳墓で、主軸方位はN-9°-Eである。平面形は隅丸長方形で、南側短軸が北側に対して狭くなっている。規模は長軸長1.57m、南側短軸長0.41m、北側短軸長0.51m、深さ約10cmを測る。屍床はほぼフラットであるが、中央部が若干低くなっている。平面形状の特徴から頭位は北側と考えられる。なお、遺物は出土しなかった。

ST52 (第8図, 図版4)

ST44の南西10mで検出した。SK76に後出する。主軸方位はN-19°-Wである。二段掘りの土墳墓で、平面形は長方形を呈し、上段の南西部がやや張り出す。上段の規模は、長軸長2.81m、



第8図 ST44・45・52実測図 (1/40)

短軸長1.56mを測る。また、下段までの深さは30～50cm程度で、南側が浅い。下段は、上段のやや北よりに掘削される。下段の規模は、長軸長2.21m、短軸長0.75～0.85m、深さ8～16cmを測り、屍床の断面形状は凹レンズ状を呈する。遺物は出土していない。

木棺墓

ST45 (第8図, 図版4)

ST44の南東4mで検出した。主軸方位はN-16°-Wである。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸長2.01m、短軸長0.73mで、底面までの深さは33cmを測る。下端の規模は長軸長1.79m、短軸長0.65mである。底面はほぼ水平で、壁面は長軸部分が外傾し、短軸部分が垂直に立ち上がる。

棺痕跡は認められなかったが、埋土内から多数の鉄製釘が出土し、木棺墓と考えられる。また、底面中央の北側から黒色土器B類壙が出土した。壙は底面の直上で、東に傾いた状態であった。憶測の域を出ないが、棺材に立てかけるように供されたものと仮定すれば、棺材の厚さは10cm程度、棺体の短軸内法は約50cmと推定される。この他、弥生土器片と土器片が出土した。

石蓋土壙墓

ST66 (第9図, 図版4)

西区南西で検出した石蓋土壙墓で、ST51・67に先出し、ST75に後出する。主軸方位はN-83°-Eである。墓壙は二段掘りで、上段の平面形は長方形を呈する。規模は長軸長1.96m、短軸長1.55mを測り、下段までの深さは41～58cmである。下段は上段の南よりに掘削され、平面形は長円形で、規模は長軸長1.41m、短軸長0.38mを測る。上段底面から屍床までの深さは西部が23cm、中央部が32cm、東部が47cmである。長軸断面は「足元掘込式」であり、短軸断面は袋状を呈する。

石蓋は、まず下段の上端東半に沿うように石材を配したのち、粘土で蓋の固定と高さの調整を行いながら、西から4石、東に1石を順次架構したものと推定される。最終的には計6石を用いて下段の墓壙を閉じている。石材は片岩製である。埋土内から遺物は出土しなかったが、屍床西側の床直上で赤色物を確認した。分析調査を行っていないため詳細は不明であるが、赤色顔料と推測され、断面形状とあわせて考慮すると頭位は西と考えられる。

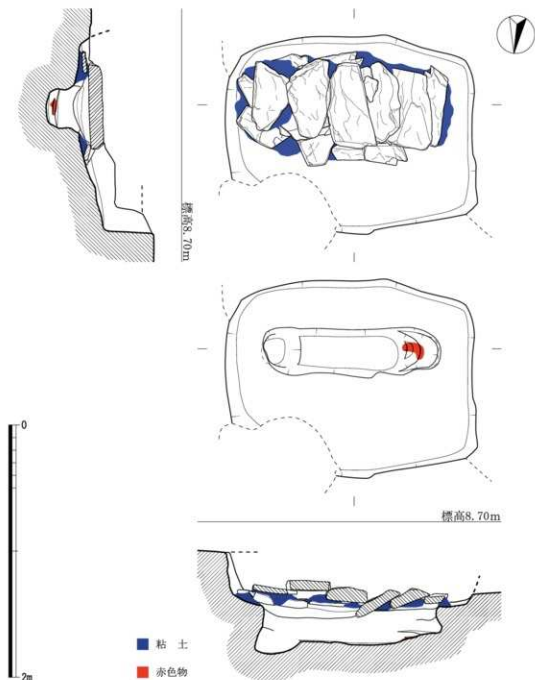
甕棺墓

ST47 (第10図, 図版5)

西区南西端で検出した大形棺で、上甕は遺存しない。墓壙の平面形は略方形で、一辺0.8～1.1m、深さ68cmを測る。底面断面形は若干凹凸を成し、東壁は緩やかに立ち上がり、狭長なステップを経て上端に至る。西壁は袋状を呈する。傾斜角は45°を測り、主軸方位はN-63°-Eである。

ST48 (第10図, 図版5)

ST47の北東4mで検出した。ST49に先出する。削平の影響で遺存状態が悪い。墓壙の平面形は不明で、規模は東西長0.6m以上、南北長1.15m以上、深さは最大18cmを測る。甕棺は小形棺で、上甕が元位置を留めていないため断定はできないが、合口形式は接口式と思われる。傾斜角は59°を測り、主軸方位はN-67°-Wである。

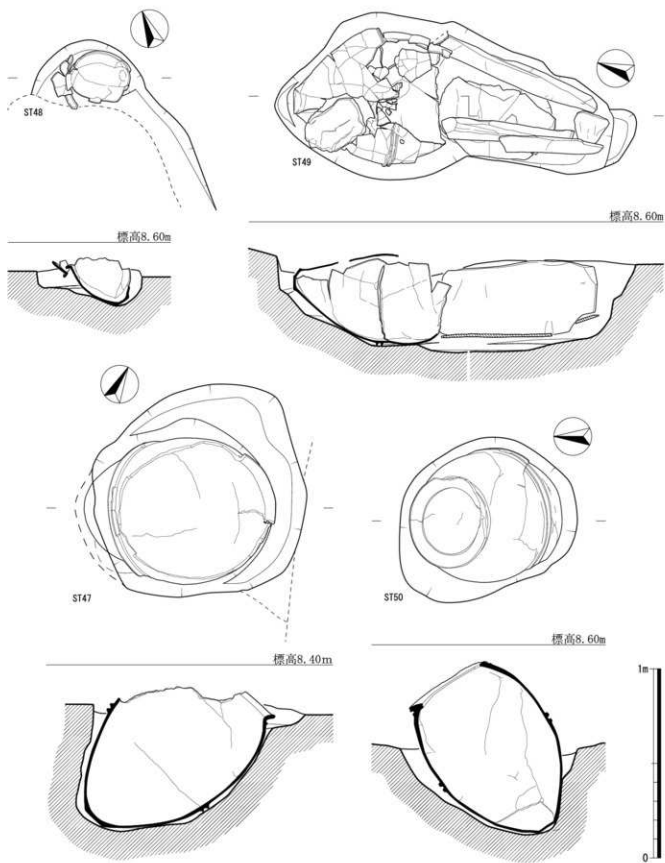


第9図 ST66実測図 (1/30)

ST49 (第10図, 図版5)

ST48の西で検出した。ST48に後出する。検出当初は重複関係にあるものと考えていたが、埋土に明解な差異が認められなかったことと、後述する特徴から甕棺および石棺の折衷形態をとる墳墓と判断した。なお、調査中に甕棺の一部が崩落したため、立面図に一部反映できなかった。

主軸方位は甕棺を基準としてN-17°-Wを計測する。墓壇は不整形を呈し、長軸長1.92mを測る。甕棺側は最大で短軸0.86m、深さ46cmを測り、断面形は甕棺の突帯付近から緩やかに立ち上



第10図 ST47・48・49・50実測図(1/20)

がり、2段のステップを経て、垂直に立ち上がっている。石棺側は最大で短軸0.74m、深さ48cmを測り、底面はほぼ水平であるが小口付近が底面から5cmほど高くなる。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、中程から外傾したのち上端に至る。

甕棺は大形棺で、覆土の土圧の影響で上部より押しつぶされたような状態で出土した。甕棺の底部付近には片岩製の石材が据え置かれている。口縁部付近は打ち欠かれており、石棺と接することを意図したものと推定される。傾斜角は底部の位置から判断すると $\pm 0^\circ$ で、墓壇に沿うように埋置され、甕棺の下位と敷石の高さがほぼ一致する。

石棺は扁平な石材1石を屍床とし、西側壁に2石、東側壁に1石を立てる。石材はすべて片岩製である。側壁は削平時の影響か東に若干傾いた状態であるが、ほぼ元位置を留めているものと思われる。南側で検出した小振りの1石は小口を閉じた石材の一部が落ち込んだものであろう。棺内内法は、現状で長軸が側壁端部間で0.88m、短軸が0.16～0.39mを測る。頭位は不明であるが、石棺南側が非常に狭小であることから、北と推定される。棺内から遺物は出土しなかった。

ST50 (第10図, 図版5)

ST49の東1mで検出した。上甕は削平時の影響により遺存状態が悪く、図化できなかった。検出できた墓壇の平面形は不整形を呈し、規模は長軸長1.01m、短軸長0.77m、深さ47cmを測る。北壁は緩やかに傾斜を成し、南壁は垂直に立ち上がる。合口形式は接口式で、下甕は大形棺、上甕は胴部中位から上半を打ち欠く。傾斜角は 56° を測り、主軸方位は $N - \pm 0^\circ$ である。

ST51 (第11図, 図版5)

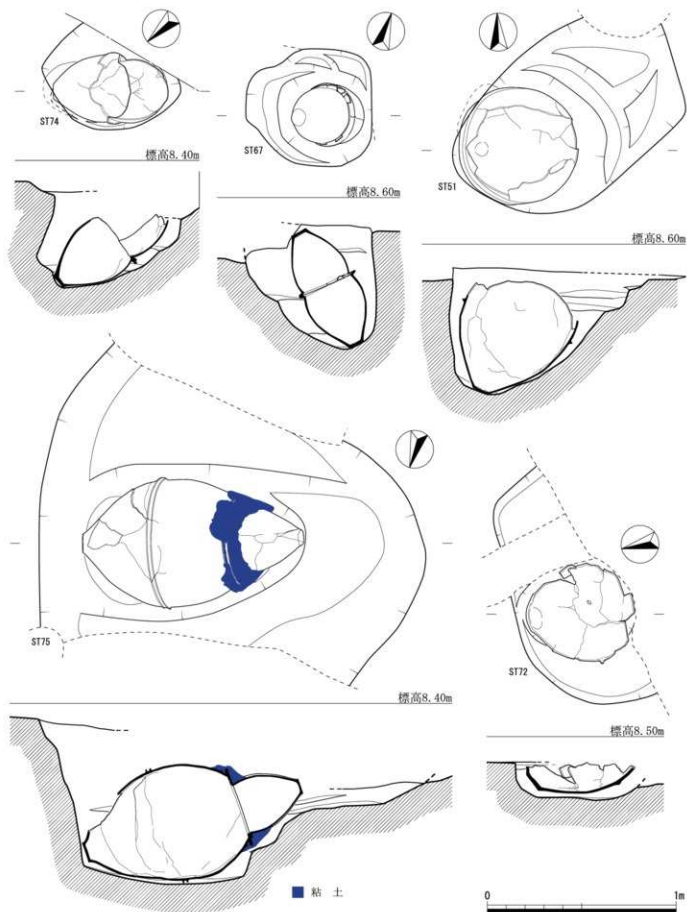
ST50の東2mで検出した。ST66に後出する。上甕は下甕の埋土内に落ち込んでおり、図化していない。墓壇の平面形は長円形で、規模は長軸長1.33m以上、短軸長0.82m、深さ67cmを測る。壇内東側にはステップを3段有し、底面は狭小である。壁面は東側が緩やかに、西壁が垂直に立ち上がっている。合口の形式は不明で、下甕は大形棺、上甕は胴部中位から上半を打ち欠く。傾斜角は 64° を測り、主軸方位は $N - 87^\circ - W$ である。

ST67 (第11図, 図版5)

ST51の西2mで検出した。ST66に後出する。墓壇の平面形は略方形で、一辺0.62～0.67m、深さは66cmである。底面は狭小で、西側から北側へステップが巡り、順次高くなっている。壁面は東壁が垂直に、西壁が階段状に立ち上がる。甕棺は接口式の小形棺で、傾斜角は 63° を測り、主軸方位は $N - 73^\circ - E$ である。

ST72 (第11図, 図版5)

拡張区西で検出した。削平および攪乱が著しく上甕は遺存しない。墓壇の平面形は不明であるが、東西長1.36m、南北長0.65m以上、深さ20cmを測る。壇内の東西両側に広大なステップを有しており、底面との比高は15cm程度である。底面にはやや凹凸が確認できるが、ほぼ水平である。北壁は外傾したのち、中程で垂直に立ち上がる。甕棺は大形棺で、傾斜角は 39° を測り、主軸方位は $N - 15^\circ - E$ である。



第11圖 ST 51・67・72・74・75 実測図 (1/20)

ST74 (第11図, 図版5)

ST72の東4mで検出した。南側が調査区外に及ぶ。検出できた墓壇は、平面形が楕円形、直径が0.6m程度と推定され、深さは56cmである。底面断面形はスロープ状で、東へ比高を減じる。壁面は、東壁が奥行き最大20cm掘り込まれ袋状であるのに対し、西壁は底面から引き続き緩傾斜を成し、2段のステップを経て垂直に立ち上がる。甕棺は接口式の小形棺で、傾斜角は40°を測り、主軸方位はN-43°-Eである。

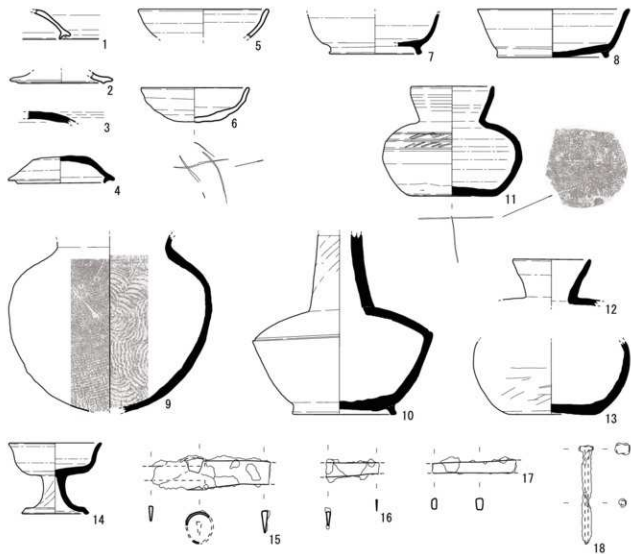
ST75 (第11図, 図版5)

ST74の北1mで検出した。ST66に先出する。墓壇の平面形は不明で、規模は東西長2.05m、南北長1.53m以上、深さ87cmを測る。底面の断面形は凹レンズ状で、東壁は外傾し、西壁は階段状を成す。土圧の影響で上甕の合口付近が下甕内に押し込まれている。甕棺は小形棺と大形棺の接口式で、接合部に目貼り粘土を施す。傾斜角は17°を測り、主軸方位はN-73°-Eである。

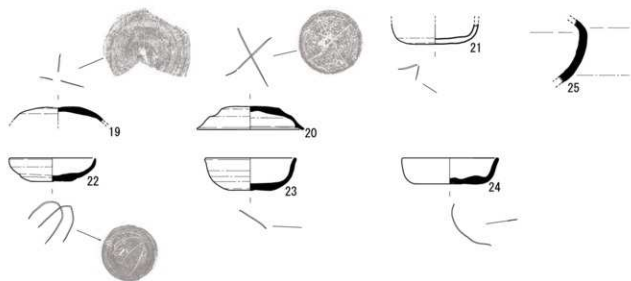
iii. 出土遺物

本調査ではパンコンテナー22箱分の遺物が出土した。その大半は甕棺墓およびSK57・58から出土した弥生土器である。須恵器・土師器がこれに次ぎ、黒色土器・石製品・金属製品はいずれも少量で、この他に縄文土器2点を採集している。紙幅の都合上、甕棺についてのみ概略を記す。

94はST47下甕で、器形は倒卵形を呈し、頸部はややすぼまる。口縁はく字状を呈し、傾斜がきつい。口縁下に三角突帯を1条、胴部中位の下方にコ字状突帯を2条巡らす。外面および口縁内面に刷毛目調整が良く残る。**95・96**はST48出土甕棺で、前者は底部を欠く。胴部は丸みを持ち、95の張り出しが大きい。95の口唇は肥厚し、端部が垂下するのに対して、**96**の口縁は内傾し、内側に稜を有す。**97**はST49下甕で、底部はやや上げ底で、胴部は全体的に丸みを持つ。器壁は薄く均一で、胴部中位にコ字状突帯が2条付される。外面全体に刷毛目を施し、胴部下位には径1.2cm程度の孔が内面より穿たれる。**98**はST50上甕で、胴部中位で打ち欠く。底部は僅かに上げ底で、突帯はコ字状を呈する。**99**はST50下甕で、器形は丸く、口縁下ですぼまる。口縁はT字状を呈し、上面は内傾する。口縁下に三角突帯を1条、胴部中位にコ字状突帯を2条巡らす。**100**はST51上甕で、底部を欠く。胴部中位で打ち欠かれ、その直下に三角突帯が1条認められる。**101**はST51下甕で、器形は全体的に丸く、肩が大きく張り、頸部はしまる。口縁は外反気味で、内側に稜を有す。胴部中位に付したコ字状突帯には刻み目が施される。**102・103**はST67出土甕棺で、やや上げ底の底部を有し、胴部は張り、頸部はしまる。口縁は逆L字状で、内傾し、後者の方がその傾向が顕著である。**104**はST72下甕で、口縁～胴部上位を欠く。器形は丸味が強く胴部中位にだけたコ字状突帯を1条付す。胴部下位に1.5～2.5cm程度の孔を内面より穿つ。**105・106**はST74出土甕棺で、胴が張り、前者の口縁はく字状に近く、後者は逆L字状である。**107**はST75上甕で、平底の底部を持ち、胴下位は比較的シャープである。口縁下で僅かにしまり、口縁は逆L字状を呈する。**108**はST75下甕で、底部はスマートで、器形は丸味を持ち、頸部は強くしまる。口縁はT字状を呈し、口縁下に1条、胴部中位に2条の三角突帯を巡らす。



SD4



SD42



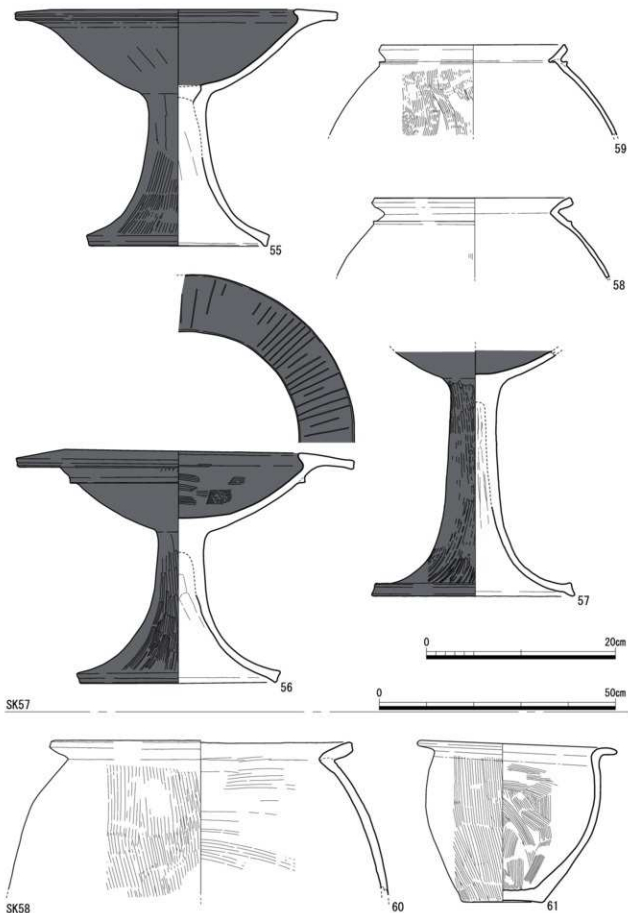
第12図 SD4・42出土遺物実測図(15・16・17:1/2、その他:1/4)



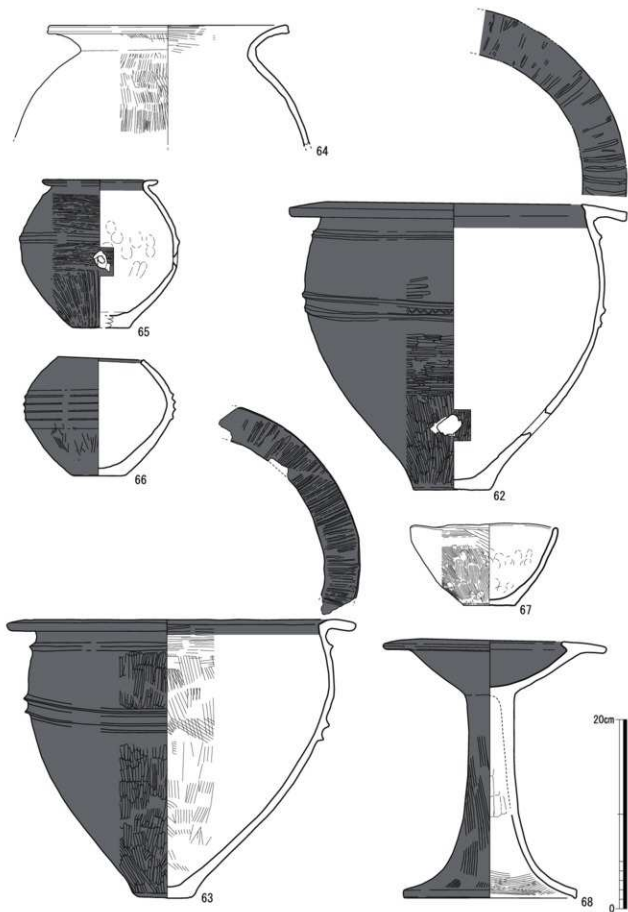
第13図 SK1・3・21・30・46・53・54出土物実測図(1/4)



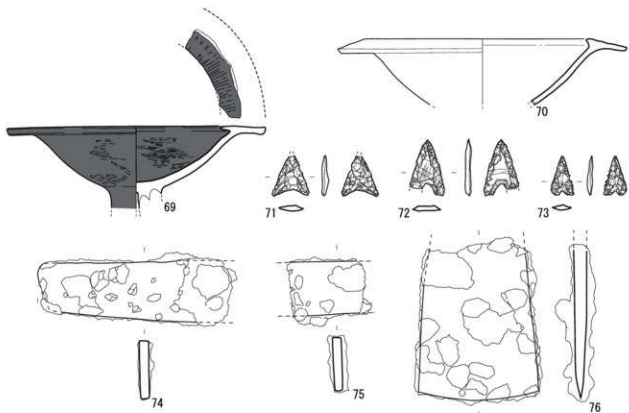
第14図 SK57 出土遺物実測図 (1/4)



第15図 SK57・58 出土遺物実測図 (58・59 : 1/8、その他 : 1/4)



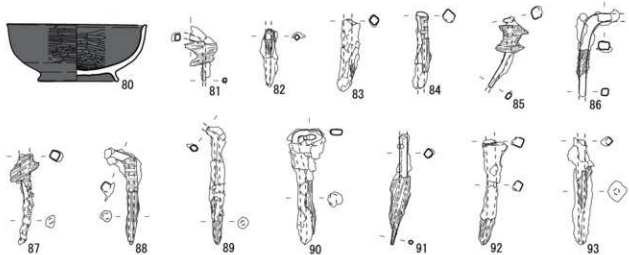
第16図 SK58 出土遺物実測図 (1/4)



SK58



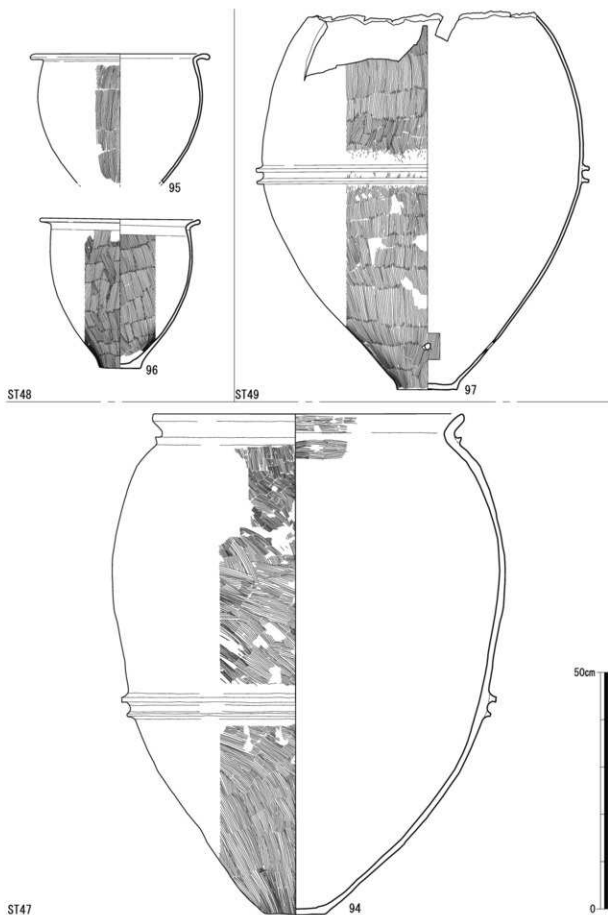
SK65



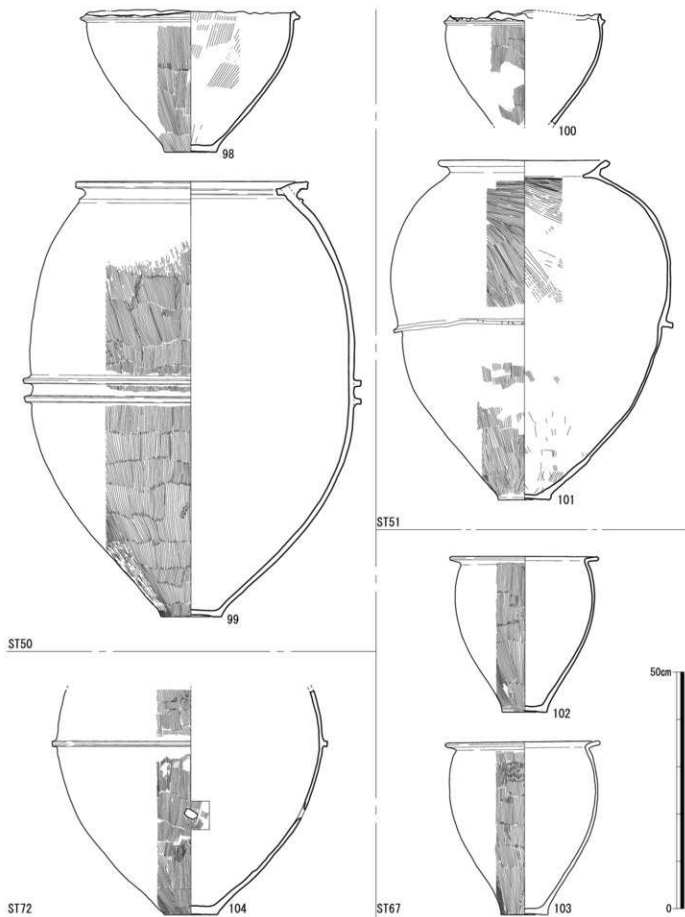
ST45



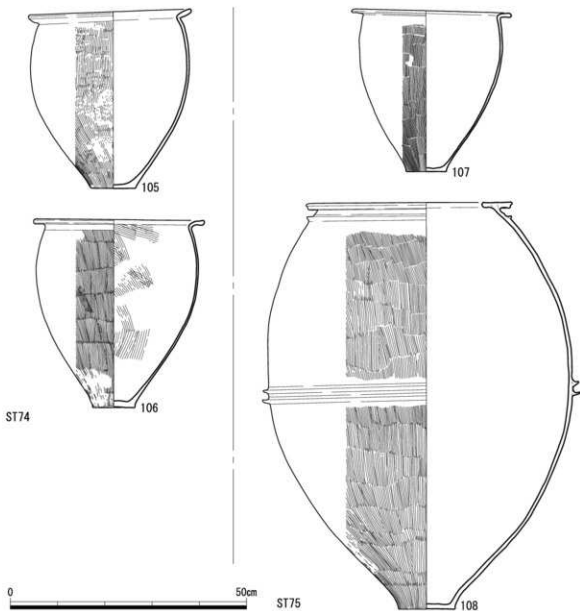
第17図 SK58・65、ST45 出土遺物実測図 (71~76、83~95: 1/2、その他: 1/4)



第18図 S T47～49 出土遺物実測図 (1/8)



第19図 S T50・51・67・72 出土遺物実測図 (1/8)



第20図 S T74・75 出土遺物実測図 (1/8)

第1表 出土遺物観察表①

遺物 No.	出土 遺構	種別	器種	寸法 (cm)			色調		調態		胎土	備考	登録 番号
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
1 第1296	SD4	土師器	蓋	-	-	(3.1)	にぶい・黄緑	同彩ナツム	ナツム	同彩ナツム	精良		302113 000029
2 第1296	SD4	土師器	蓋	(9.2)	受部 (11.2)	(1.15)	橙	橙	同彩ナツム	同彩ナツム	精良		302113 000030
3 第1296	SD4	灰土器	蓋	-	-	(1.2)	灰黄陶	灰黄	同彩ヘラケズリ 同彩ナツム	ナツム	精良		302113 000028
4 第1296	SD4	灰土器	蓋	取し 9.2	天井部 6.1	2.9	灰白	灰白	同彩ヘラケズリ 同彩ナツム	同彩ナツム	細織(長石)		302113 000024
5 第1296	SD4	土師器	坏	(11.8)	-	(3.0)	橙	橙	同彩ナツム	同彩ナツム	精良		302113 000031
6 第1296	SD4	土師器	坏	11.4	5.0	3.7	灰青陶 橙	橙	同彩ナツム ヘラケズリナツム	同彩ナツム	細砂粒(白色砂粒), 非 色粒子	ヘラ記号	302113 000037
7 第1296	SD4	灰土器	高台	-	8.75	(4.2)	灰	陶灰	同彩ナツム ヘラケズリナツム	同彩ナツム 同彩ナツムナツム	精良		302113 000027
8 第1296	SD4	灰土器	高台 付坪	(16.0)	11.8	5.1	灰陶 陶灰	灰黄陶 陶灰	同彩ナツム 同彩ヘラケズリ	同彩ナツム 同彩ナツムナツム	細織(白色砂粒)		302113 000035
9 第1296	SD4	灰土器	壺	-	-	(18.6)	暗赤灰	陶灰	同彩ナツム 同彩ナツム	同彩ナツム 片貝類	粗砂粒(白色砂粒)		302113 000036
10 第1296	SD4	灰土器	高台 付壺	-	高台10.0	(19.0)	黄灰 オリーブ系	灰	同彩ヘラケズリ 同彩ナツム	同彩ナツム ヘラケズリナツム	細織(長石)	シロ印痕	302113 000025

第2表 出土遺物観察表②

遺物 №	出土 遺構	種別	原種	法長(cm)			色澤				胎土	備考	登録 番号
				口徑	底径	厚さ	外面	内面	外面	内面			
11 第13区	SD4	煎茶器	蓋	〔8.8〕	〔9.4〕	〔11.6〕	灰 ナマリ層	焼灰	白転ナブ ヘラズリ後ナブ	白転ナブ 白転ナブ後ナブ	粗砂粒(白色砂粒)、赤 色粘土	ヘラ記号 面土復元	201113 000026
12 第13区	SD4	煎茶器	蓋	〔8.2〕	-	〔4.8〕	灰 赤土	灰黄 灰赤	白転ナブ	白転ナブ ナブ	粗砂粒(白色砂粒)		201113 000025
13 第13区	SD4	煎茶器	蓋	-	10.7	(7.7)	灰 赤土	黄赤灰 緑赤灰	白転ナブ	白転ナブ ナブ	細糠(白色砂粒)		201113 000024
14 第13区	SD4	煎茶器	高杯	〔9.8〕	脚高 7.6	7.8	灰 赤土	灰黄 灰	白転ナブ	白転ナブ 白転ナブ後ナブ	粗砂粒(白色砂粒)、黒 色粘土	ナブ印号	201113 000023
15 第13区	SD4	煎茶器	刀子	(6.4)	0.7~ 1.2	0.1~0.3	-	-	-	-	-	11.42g	201113 000087
16 第13区	SD4	煎茶器	刀子	(2.75)	0.8~ 0.75	0.2	-	-	-	-	-	1.53g	201113 000086
17 第13区	SD4	煎茶器	刀子	(4.45)	0.5~ 0.7	0.25~ 0.35	-	-	-	-	-	2.58g	201113 000085
18 第13区	SD4	煎茶器	針	8.15	0.35~ 0.75	0.45~ 0.7	-	-	-	-	-	2.81g	201113 000086
19 第13区	SD42	煎茶器	蓋	-	-	0.3	灰 浅黄 ナマリ層	灰	白転ヘラズリ 白転ナブ	白転ナブ	粗砂粒(長石、石膏)	ヘラ記号	201113 000081
20 第13区	SD42	煎茶器	蓋	〔8.3〕	6.3	2.4	灰 赤土	灰 浅黄	白転ヘラズリ 白転ナブ	白転ナブ後ナブ	細糠(長石)	ヘラ記号	201113 000084
21 第13区	SD42	土師器	杯	-	6.0	(2.15)	灰 赤土	黄赤灰	白転ナブ 白転ヘラズリ後ナブ	白転ナブ ナブ	粗砂粒(黄砂)	ヘラ記号	201113 000083
22 第13区	SD42	煎茶器	杯	〔9.13〕	4.45	2.5	灰白 灰黄	灰黄 灰黄	白転ナブ 白転ヘラズリ 白転ヘラズリ後ナブ	白転ナブ	粗砂粒(長石)	ヘラ記号	201113 000080
23 第13区	SD42	煎茶器	杯	〔8.6〕	〔4.4〕	3.4	灰 赤土	灰	白転ナブ 白転ヘラズリ後ナブ	白転ナブ後ナブ	細糠(長石)	ヘラ記号	201113 000086
24 第13区	SD42	煎茶器	杯	10.0	7.13	2.75	灰 赤土	灰黄	白転ナブ ヘラズリ後ナブ	白転ナブ	粗砂粒(長石)	ヘラ記号	201113 000087
25 第13区	SD42	煎茶器	煎	-	-	0.7	灰 赤土	灰 赤土	白転ナブ 白転ヘラズリ	白転ナブ	軽土		201113 000082
26 第13区	SK1	赤土 土器	壺	〔31.8〕	-	(6.2)	浅黄 赤土	赤土	コナナブ 細毛目後コナナブ	コナナブ	粗砂粒(長石、雲母)		201113 000010
27 第13区	SK1	赤土 土器	壺	〔31.8〕	-	(8.85)	浅黄 赤土	赤 赤土	コナナブ 細毛目後コナナブ	コナナブ 細オサユ 細毛目	粗砂粒(長石、角閃石)		201113 000016
28 第13区	SK1	赤土 土器	壺	32.6	-	(5.4)	浅黄緑 黄 赤土	赤土	コナナブ 細毛目後コナナブ	コナナブ	粗砂粒(黄砂、角閃石)	スス付着	201113 000011
29 第13区	SK1	赤土 土器	壺	〔9.4〕	(7.4)	〔7.4〕	灰黄 緑 赤土	灰 赤土	白転ナブ 細毛目	ナブ ナブ	粗砂粒(長石、雲母) 粗砂粒(角閃石)		201113 000014
30 第13区	SK1	赤土 土器	壺	-	7.9	(8.33)	灰黄緑 赤土	浅黄緑 赤土	細毛目 ナブ	ナブ ナブ	粗砂粒(角閃石)	穿孔	201113 000012
31 第13区	SK1	赤土 土器	壺	-	〔9.4〕	(32.7)	黄 赤土	赤黄緑	細毛目 細オサユ ナブ	ナブ	粗砂粒(黄砂) 粗砂粒(長石、雲母)	スス付着	201113 000013
32 第13区	SK1	赤土 土器	壺	〔15.8〕	-	(1.95)	灰 赤土	黄 赤土	コナナブ	コナナブ	粗砂粒(黄砂)、赤色粘 土		201113 000017
33 第13区	SK1	赤土 土器	器台	〔9.0〕	(7.9)	(18.6)	灰 赤土	黄 赤土	ナブ ナブ	ナブ ナブ	粗砂粒(長石、雲母)	面土復元	201113 000018
34 第13区	SK3	煎茶器	境	-	高さ99.00	(1.8)	灰 赤土	灰黄 赤土	白転ヘラズリ ヘラズリ	白転ナブ ナブ	粗砂粒(長石)		201113 000023
35 第13区	SK21	赤土 土器	壺	-	-	(2.6)	浅黄緑	浅黄緑	白転ナブ	白転ナブ	粗砂粒(黄砂、角閃石)、 赤色粘土		201113 000029
36 第13区	SK21	赤土 土器	壺	-	-	(6.8)	黄	黄	白転ナブ	白転ナブ	粗砂粒(黄砂)、赤色粘 土		201113 000028
37 第13区	SK30	赤土 土器	壺	-	-	(4.6)	浅黄緑	浅黄緑	白転ナブ	白転ナブ	粗砂粒(黄砂、角閃石)		201113 000040
38 第13区	SK46	赤土 土器	壺	〔34.0〕	-	(8.7)	黄	黄	ナブ コナナブ	ナブ ナブ	粗砂粒(黄砂)	穿孔	201113 000044
39 第13区	SK46	赤土 土器	壺	〔34.8〕	-	(5.0)	灰白 赤土	灰白 赤土	コナナブ ナブ	ナブ コナナブ	粗砂粒(黄砂)		201113 000045
40 第13区	SK46	赤土 土器	壺	-	(9.0)	(8.3)	灰白 赤土	灰黄緑	細毛目	ナブ	粗砂粒(黄砂)、赤色粘 土		201113 000046
41 第13区	SK46	赤土 土器	高杯	-	脚高 (16.0)		黄	黄	細毛目 コナナブ	ナブ コナナブ	粗砂粒(黄砂)		201113 000047
42 第13区	SK33	赤土 土器	壺	-	-	(2.0)	灰白 赤土	灰白 赤土	コナナブ	コナナブ	軽黄		201113 000050
43 第13区	SK33	赤土 土器	高杯	-	-	(11.9)	黄 赤土	灰白 赤土	ナブ	ナブ	細糠(長石、雲母、角閃 石)	片断物	201113 000052
44 第13区	SK34	赤土 土器	高杯	〔25.0〕	〔18.4〕	22.4	黄	灰白 赤土	コナナブ 工具ナブ ナブ	コナナブ	細糠(長石、石膏、雲母) ナブ	母文 片断物	201113 000053
45 第13区	SK37	赤土 土器	壺	-	-	(5.65)	赤黄 浅黄緑	黄赤緑 赤土	細毛目 コナナブ	コナナブ	粗砂粒(黄砂)	母文 片断物	201113 000051
46 第13区	SK37	赤土 土器	壺	〔17.0〕	8.5	18.2	灰白 赤土	浅黄緑	ナブ コナナブ 細毛目	ナブ ナブ	粗砂粒(黄砂)、赤色粘 土		201113 000059
47 第13区	SK37	赤土 土器	壺	30.7	-	(23.5)	灰白 赤土	灰黄緑 赤土	ナブ ナブ	ナブ ナブ	粗砂粒(長石、石膏、角 閃石、雲母)	片断物	201113 000061
48 第13区	SK37	赤土 土器	煎	〔9.4〕	-	(6.2)	灰 赤土	黄 赤土	コナナブ 細毛目	コナナブ 工具黄	粗砂粒(黄砂)	片断物	201113 000055
49 第13区	SK37	赤土 土器	鉢	〔18.5〕	3.7	4.1	灰白 赤土	灰 赤土	細毛目 ナブ	ナブ コナナブ 細オサユ	粗砂粒(角閃石)	片断物 煎器	201113 000067
50 第13区	SK37	赤土 土器	鉢	16.6	6.3	3.4~3.6	灰白 赤土	灰白 赤土	コナナブ 細毛目 ナブ	コナナブ ナブ 工具黄ナブ	粗砂粒(黄砂)	黄緑	201113 000058

第3表 出土遺物観察表③

遺物 No.	出土 遺構	類別	時期	法長(cm)			色澤				胎土	備考	登録 番号	
				口徑	底径	器高	外面		内面					胎土
							長	幅	厚	外面				
51 第14層	SK37	赤土 土器	高坪	-	-	(6.3)	明赤褐色 に濃い赤褐色	に濃い赤褐色 に濃い赤褐色	ココナテ ナツカ	ココナテ	細砂粒(雲母)	緑文 丹塗り	201113 000056	
52 第14層	SK37	赤土 土器	高坪	-	-	(6.0)	に濃い赤褐色	に濃い赤褐色	ココナテ ナツカ	ココナテ	細砂粒(雲母)	緑文	201113 000058	
53 第14層	SK37	赤土 土器	高坪	29.2	21.1	29.5	赤褐色 に濃い赤褐色	赤褐色 明赤褐色	ナツカ ココナテ	ココナテ	細砂粒(雲母,角閃石)	緑文・丹塗り	201113 000064	
54 第14層	SK37	赤土 土器	高坪	28.7	21.0	25.0	赤褐色 に濃い赤褐色	に濃い赤褐色	赤褐色 ココナテ	ココナテ	粗砂粒(石英,雲母,角閃石,白色砂粒)	緑文・丹塗り	201113 000065	
55 第15層	SK37	赤土 土器	高坪	34.3	(19.3)	25.0	に濃い赤褐色	に濃い赤褐色	ココナテ ナツカ	ココナテ	明赤(雲母)	丹塗り	201113 000068	
56 第15層	SK37	赤土 土器	高坪	35.8	脚径21.5	24.8~ 24.25	明赤褐色 に濃い赤褐色	明赤褐色 に濃い赤褐色	ココナテ ココナテ	ココナテ	細砂粒(石英,雲母,白色砂粒),黒色砂子	緑文	201113 000069	
57 第15層	SK37	赤土 土器	高坪	-	[21.5]	(25.9)	明赤褐色	明赤褐色	ココナテ	ココナテ	明赤(角閃石)	丹塗り	201113 000066	
58 第15層	SK37	赤土 土器	腰紐	(42.6)	-	(16.8)	赤褐色	赤褐色	ナツカ	ナツカ	細砂粒(白色砂粒),黒色砂子	黒色大樽(37.6)cm	201113 000061	
59 第15層	SK37	赤土 土器	腰紐	(39.8)	-	(19.0)	に濃い赤褐色	に濃い赤褐色	ナツカ	ココナテ	細砂粒(角閃石),赤色砂子		201113 000064	
60 第15層	SK38	赤土 土器	腰	32.1	-	(16.3)	赤褐色	赤褐色	ココナテ	ナツカ	細砂粒(雲母)		201113 000071	
61 第15層	SK38	赤土 土器	腰	21.0	8.6	16.3~ 17.1	赤褐色	に濃い赤褐色	ココナテ	ココナテ	粗砂粒(雲母)	黒染	201113 000070	
62 第16層	SK38	赤土 土器	腰	35.6	6.0	30.5~ 30.2	赤褐色	に濃い赤褐色	ココナテ	ココナテ	粗砂粒(雲母,白色砂粒),黒色砂子	緑文・丹塗り	201113 000080	
63 第16層	SK38	赤土 土器	腰	(36.9)	(6.6)	(29.4)	赤褐色	赤褐色	ナツカ	ナツカ	細砂粒(白色砂粒)	緑文	201113 000076	
64 第16層	SK38	赤土 土器	腰	(25.5)	-	(21.2)	赤褐色	赤褐色	ココナテ	ココナテ	細砂粒(角閃石,白色砂粒),赤色砂子		201113 000072	
65 第16層	SK38	赤土 土器	底	12.2	6.0	15.7	赤褐色	赤褐色	ココナテ	ココナテ	粗砂粒(角閃石)	緑文・丹塗り	201113 000078	
66 第16層	SK38	赤土 土器	底	9.1	5.2	12.6~ 12.3	赤褐色	赤褐色	ココナテ	ココナテ	粗砂粒(雲母,白色砂粒),黒色砂子	丹塗り	201113 000070	
67 第16層	SK38	赤土 土器	鉢	15.6	5.4	6.6	に濃い赤褐色	赤褐色	ココナテ	ココナテ	粗砂粒(雲母)	黒染	201113 000081	
68 第16層	SK38	赤土 土器	高坪	(23.8)	18.2	27.4~ 27.1	に濃い赤褐色	に濃い赤褐色	ココナテ	ココナテ	細砂粒(雲母)	丹塗り	201113 000082	
69 第17層	SK38	赤土 土器	高坪	(27.3)	-	(6.6)	赤褐色	明赤褐色	ナツカ	ココナテ	細砂粒(雲母,角閃石)	緑文・丹塗り	201113 000079	
70 第17層	SK38	赤土 土器	高坪	30.5	-	(7.0)	赤褐色	赤褐色	ココナテ	ココナテ	粗砂粒(雲母,角閃石,白色砂粒),黒色砂子	丹塗り	201113 000080	
71 第17層	SK38	石製品	鏝	(2.1)	1.9	0.4	-	-	-	-	-	-	201113 000075	
72 第17層	SK38	石製品	鏝	(3.0)	1.80	0.4	-	-	-	-	-	-	201113 000074	
73 第17層	SK38	石製品	鏝	2.1	1.2	0.3	-	-	-	-	-	-	201113 000073	
74 第17層	SK38	鉄製品	刀子	(10.43)	2.8~ 3.8	0.5	-	-	-	-	-	-	201113 000102	
75 第17層	SK38	鉄製品	刀子	(4.4)	2.6~ 3.6	0.4~ 0.45	-	-	-	-	-	-	201113 000103	
76 第17層	SK38	鉄製品	板状 鉄片	(9.30)	5.2~ 6.4	0.1~0.7	-	-	-	-	-	-	201113 000104	
77 第17層	SK65	赤土 土器	腰	(25.2)	-	(7.0)	に濃い赤褐色	に濃い赤褐色	ココナテ	ココナテ	細砂粒(雲母)		201113 000088	
78 第17層	SK65	赤土 土器	腰	(19.0)	-	(6.8)	赤褐色	に濃い赤褐色	ココナテ	ココナテ	粗砂粒(雲母)		201113 000089	
79 第17層	SK65	赤土 土器	鉢	-	-	(6.0)	に濃い赤褐色	に濃い赤褐色	ココナテ	ココナテ	粗砂粒(雲母)		201113 000090	
80 第17層	ST45	赤土 土器	椀	14.8	6.5	6.0	黒	黒	ココナテ	ココナテ	粗砂粒(雲母)	黒目	201113 000041	
81 第17層	ST45	鉄製品	釘	(2.5)	(1.7)	0.2~0.4	-	-	-	-	-	-	201113 000089	
82 第17層	ST45	鉄製品	釘	(3.00)	0.3~ 0.8	0.4	-	-	-	-	-	-	201113 000100	
83 第17層	ST45	鉄製品	釘	(3.8)	1.0	0.65~ 1.0	-	-	-	-	-	-	201113 000091	
84 第17層	ST45	鉄製品	釘	(4.60)	0.95	0.65	-	-	-	-	-	-	201113 000094	
85 第17層	ST45	鉄製品	釘	(3.8)	0.2~ 2.1	0.5~0.6	-	-	-	-	-	-	201113 000096	
86 第17層	ST45	鉄製品	釘	4.6	0.35~ 1.2	0.35~ 0.65	-	-	-	-	-	-	201113 000091	
87 第17層	ST45	鉄製品	釘	(0.49)	0.3~ 1.3	0.6~0.7	-	-	-	-	-	-	201113 000090	
88 第17層	ST45	鉄製品	釘	5.1	0.15~ 1.9	0.6~0.8	-	-	-	-	-	-	201113 000095	
89 第17層	ST45	鉄製品	釘	(6.2)	1.05	0.65	-	-	-	-	-	-	201113 000092	
90 第17層	ST45	鉄製品	釘	6.2	0.75~ 2.0	0.6	-	-	-	-	-	-	201113 000093	

第4表 出土遺物観察表④

遺物 No.	出土 遺構	類別	線種	寸法(cm)			色調		調整		胎土	備考	登録 番号	
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面				
				長	幅	厚								
91 第179号	ST45	鉄製品	釘	(5.83)	0.5~ 1.05	0.2~ 0.55	-	-	-	-	-	4.074 木質	202113 000298	
92 第179号	ST45	鉄製品	釘	(5.83)	0.5~ 1.3	0.55	-	-	-	-	-	4.114 木質	202113 000297	
93 第179号	ST45	鉄製品	釘	(5.13)	(1.4)	0.3~1.1	-	-	-	-	-	0.649 木質	202113 000290	
94 第180号	ST47	弥生土 土器	甕棺	65.8	12.8	106.0	緑	緑	ナデ	刷毛目	ナデ	細砂(長石、石英、雲母、角閃石)	202113 000105	
95 第180号	ST48	弥生土 土器	甕棺	(38.8)	-	(27.3)	にぶい・緑	にぶい・緑	コナデ	刷毛目	コナデ	粗砂粒(石英、雲母、白色砂粒)、紫赤色粘土	202113 000106	
96 第180号	ST48	弥生土 土器	甕棺	33.0	8.75	31.75	浅黄緑 黄灰	浅黄緑 黄灰	コナデ	刷毛目 ナデ	コナデ	刷毛目 ナデ	細砂(長石、石英、雲母、角閃石)	202113 000107
97 第180号	ST49	弥生土 土器	甕棺	68.3	12.6	80.2	浅黄緑 黄灰	浅黄緑 黄灰	コナデ	刷毛目 ナデ	ナデ	粗砂粒(長石、雲母)	202113 000108	
98 第180号	ST50	弥生土 土器	甕棺	-	11.0	(30.1)	にぶい・緑	にぶい・緑	コナデ	刷毛目 ナデ	刷毛目 ナデ	粗砂粒(長石、雲母、角閃石、白色砂粒)	202113 000109	
99 第180号	ST50	弥生土 土器	甕棺	68.4	12.6	92.0	浅黄緑 黄灰	浅黄緑 黄灰	ナデ	刷毛目	ナデ	細砂(長石、石英、雲母)	202113 000110	
100 第180号	ST51	弥生土 土器	甕棺	-	-	(24.2)	にぶい・緑	にぶい・緑	コナデ	刷毛目	ナデ	ほぼ緑黄	202113 000111	
101 第180号	ST51	弥生土 土器	甕棺	36.2	11.2	77.4	緑 黄	緑 黄	ナデ	刷毛目	ナデ	粗砂粒(雲母、角閃石)	202113 000112	
102 第180号	ST67	弥生土 土器	甕棺	31.0	9.5	32.9	にぶい・黄緑	にぶい・黄緑	コナデ	刷毛目 ナデ	コナデ	粗砂粒(雲母)	202113 000113	
103 第180号	ST67	弥生土 土器	甕棺	32.8	10.0	36.7	にぶい・黄緑 黄灰	にぶい・黄緑 黄灰	コナデ	刷毛目 ナデ	コナデ	粗砂粒(雲母)	202113 000114	
104 第180号	ST72	弥生土 土器	甕棺	-	11.4	(47.5)	にぶい・黄緑	にぶい・黄緑	コナデ	刷毛目 ナデ	ナデ	緑(石英、白色砂粒)	202113 000115	
105 第200号	ST74	弥生土 土器	甕棺	34.5	9.6	37.9	にぶい・緑	にぶい・緑	コナデ	刷毛目 ナデ	ナデ	粗砂粒(角閃石)	202113 000116	
106 第200号	ST74	弥生土 土器	甕棺	35.4	8.7	39.9	にぶい・赤褐 黄緑	浅黄緑 黄灰	コナデ	刷毛目 ナデ	刷毛目 ナデ	細砂(長石、石英、雲母、角閃石)	202113 000117	
107 第200号	ST75	弥生土 土器	甕棺	33.8	8.5	34.5	にぶい・緑	にぶい・緑	コナデ	刷毛目	コナデ	黄(雲母、白色砂粒)	202113 000209	
108 第200号	ST75	弥生土 土器	甕棺	43.4	11.7	87.0	緑 黄灰	にぶい・緑 黄灰	ナデ	刷毛目	ナデ	細砂(長石、石英、雲母、角閃石)	202113 000012	
109 第216号	東江 北東	縄文土 土器	鉢	-	-	(3.93)	緑	緑	ナデ	ナデ	ナデ	粗砂粒(滑石)	202113 000020	
110 第216号	東江 北東	縄文土 土器	鉢	-	-	(4.13)	緑	緑	ナデ	ナデ	ナデ	粗砂粒(滑石)	202113 000021	

IV. 総括

本調査では、溝3条、土坑13基、土壇墓2基、木棺墓1基、石蓋土壇墓1基、甕棺墓9基を検出した。隣地の試掘確認調査の結果から予想されたとおり、弥生時代の墳墓をはじめとした良好な資料を得ることができた。以下、時代順に整理・概観し総括としたい。

出土した資料の中で最も古く位置づけられるものは、縄文時代前期の曾畑式土器である。採取資料であり遺構に伴うものではないが、久留米市西部では高三階遺跡第7次調査地点で出土例があるので希少な資料である。本遺跡と同じ微高地に立地する田川中原遺跡では、晩期の粗製深鉢が出土しており、周辺で同時代の遺構が検出される可能性もあり、今後調査の進展が期待される。

弥生時代の遺構は土坑10基、土壇墓1基、石蓋土壇墓1基、甕棺墓9基である。土坑は中期後半を主体とし、SK65は後期初頭に下る可能性がある。また、SK76については破片資料が2点出土したのみで判断が難しいが、周辺状況から中期後半の所産と思われる。土坑の中では丹塗土器が出土したSK53・54・57・58が特筆され、後述する墳墓に関わる祭祀土坑と考えられる。

墳墓のうち、土壇墓ST52は甕棺と墓域を同じくすることから中期後半以降、石蓋土壇墓ST66

は重複関係から中期後半の所産と推定される。甕棺墓は、土坑と同じく中期後半を主体としており、ST51が中期末、ST47が後期初頭である(1)。これらの墳墓は、西区南西隅で密集して検出された。ST51・66・75の重複関係から少なくとも3期に亘ると考えられ、方位にはST67・75を除き統一性がみられない。祭祀土坑との関係については、久留米市山川神代所在の安国寺甕棺墓群の調査に詳しくこれを参考にすると(2)、祭祀土坑1基に対して3基前後の墳墓を対象とした家族的規模の祭祀が行われたと推定される。

墳墓の中で注目されるのは中期後半のST49で、甕棺と石棺との折衷形態をとる。同様の遺構は、市内では後期初頭の大城中筒井遺跡6号甕棺(北野町)があり、詳細不明ながら三明寺(田主丸町)でも発見例がある。この他、中期後半の鷹取五反田遺跡6号甕棺(うきは市)、中期中葉に比定されている栗山遺跡31号甕棺(朝倉市)が挙げられる(3)。これらには敷石や甕棺の打欠きの有無などの相違点に加え時期差も認められるが、大きくは同一形態の墓制と思われ、筑後川流域に広がっていた可能性もある。

古墳時代の遺構は未検出であるが、古代については溝2条、土坑1基、木棺墓1基を検出した。各遺構の時期は、SD4が7世紀末から8世紀前半、SD42が7世紀後半であり、SK3が8世紀前半、ST45が10世紀である。SD4は、断面形状の特徴や周辺で関連遺構と断定できるものを検出できていないため、給排水や区画を意図したものとは考え難い。特殊遺物はないが、石組の構築物があったと推定されることから別の用途を考える必要がある。

最後に、出土遺物に恵まれなかった溝1条、土坑2基、土壇墓1基のうち、SD36は方位から考えるとSD4と同時期の可能性が残るが、断定し難い。SK56は須恵器の甕細片が出土しているが、詳細な時期は不明と言わざるを得ない。これに後出するSK55も同様である。最後にST44は、弥生時代の墳墓群とは一定の距離をおいて検出されていることから関連性は希薄であり、古墳時代以後に設けられたものであろう。

第5表 弥生時代墳墓一覧表

遺構番号	墳墓形態	時期	重複関係		主軸方位	傾斜角	合口形式	備考
			先出遺構	後出遺構				
ST 47	- × 大形棺	後期初頭	-	-	N - 63° - E	45°	不明	
ST 48	小形棺 × 小形棺	中期後半	-	ST49	N - 67° - W	59°	接口	
ST 49	大形棺 × 石棺	中期後半	ST48	-	N - 17° - W	0°	-	甕棺打欠き
ST 50	小形棺 × 大形棺	中期後半	-	-	N - ±0°	56°	接口	上甕打欠き
ST 51	小形棺 × 大形棺	中期末	ST66	-	N - 87° - W	64°	不明	上甕打欠き
ST 52	土壇墓	中期後半以降	SK76	-	N - 19° - E	-	-	
ST 66	石蓋土壇墓	中期後半	ST75	ST51・67	N - 83° - E	-	-	
ST 67	小形棺 × 小形棺	中期後半	ST66	-	N - 73° - E	63°	接口	
ST 72	- × 大形棺	中期後半	-	-	N - 15° - E	39°	不明	
ST 74	小形棺 × 小形棺	中期後半	-	-	N - 43° - E	40°	接口	
ST 75	小形棺 × 大形棺	中期後半	-	ST66	N - 73° - E	17°	接口	

(1) 樋口達也『甕棺と弥生時代年代論』雄山閣、2005 (2) 久留米市教育委員会「東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書」第2集、1983 (3) 北野町教育委員会「大城中筒井遺跡」2003 / 田主丸町教育委員会「田主丸町遺跡等詳細分布調査報告書」1999 / 福岡県教育委員会「鷹取五反田遺跡1」1998 / 甘木市教育委員会「栗山遺跡」1982 ※(2)(3)のシリーズ名は省略。

写 真 图 版

図版 1



(1) 調査地より高三瀬地区を望む（東上空から）



(2) 東区全景（北東上空から）



(1) 西区全景 (南東上空から)



(2) SD 4 礎群検出状況 (北から)



(3) SD 4 完掘状況 (北から)



(4) SD 36 完掘状況 (南東から)



(5) SD 42 完掘状況 (南から)

図版 3



(1) SK 1 完掘状況 (南西から)



(2) SK 46 完掘状況 (南東から)



(3) SK 53 完掘状況 (北東から)



(4) SK 54 完掘状況 (北から)



(5) SK 57 遺物出土状況 (南西から)



(6) SK 57 完掘状況 (東から)



(7) SK 58 遺物出土状況 (東から)



(8) SK 58 完掘状況 (北から)



(1) SK 76 完掘状況 (北から)



(2) ST 44 完掘状況 (南から)



(3) ST 52 完掘状況 (北から)



(4) ST 45 遺物出土状況 (北西から)



(5) ST 45 完掘状況 (南西から)



(6) ST 66 石蓋検出状況 (北東から)



(7) ST 66 完掘状況 (南東から)



(8) ST 66 赤色物検出状況 (東から)

図版 5



(1) ST 47 甕棺検出状況 (西から)



(2) ST 48・49 甕棺検出状況 (南東から)



(3) ST 49 石棺検出状況 (南から)



(4) ST 50・67 甕棺検出状況 (東から)



(5) ST 51 甕棺検出状況 (北西から)



(6) ST 72 甕棺検出状況 (北西から)



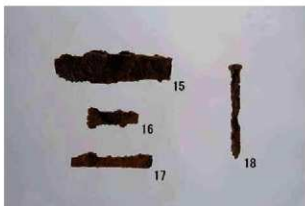
(7) ST 74 甕棺検出状況 (北西から)



(8) ST 75 甕棺検出状況 (南東から)

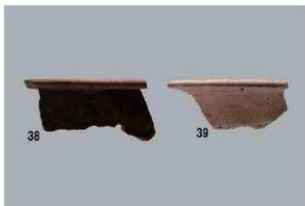
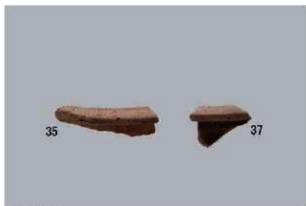
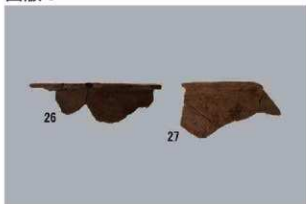


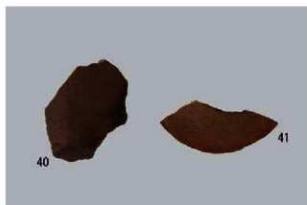
図版 7





图版 9



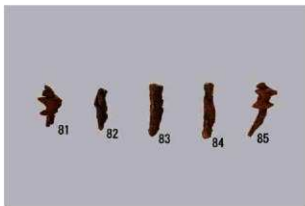
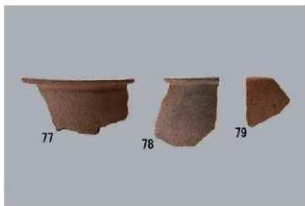
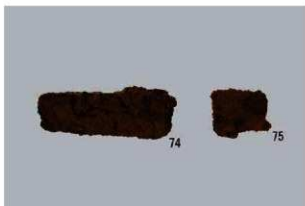
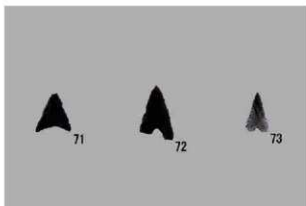


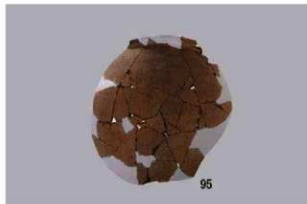
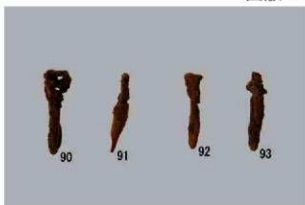
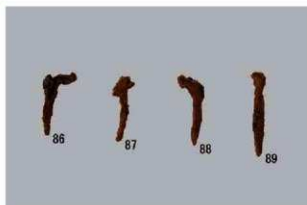
図版 11





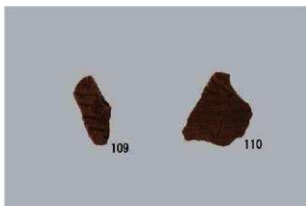
图版 13





出土遺物⑨





報 告 書 抄 録

ふりがな	はやつぎごたんたいせき だいいちじ はつくつちようきほうこく		
書 名	早津崎五反田遺跡 第1次発掘調査報告		
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書		
シリーズ番号	第445集		
編著者名	廣木 誠		
編集機関	久留米市 市民文化部 文化財保護課		
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 Tel:0942-30-9225 Fax:0942-30-9714 Email:bunkazai@city.kurume.lg.jp		
発行年月日	2023 (令和5) 年3月31日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
はやつぎごたんたいせき 早津崎五反田遺跡 第1次調査	くろめしみつまちははやつ 久留米市三瀬町早津 ぎあごたんだ ほんほつ 崎字五反田1006番1外	40203	—	33° 15' 50"	130° 28' 11"	20211101 ～ 20220117	1,200㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
早津崎五反田遺跡 第1次調査	墓地	弥生 古代	溝 土坑 土壇墓 木棺墓 石蓋土壇墓 甕棺墓	3条 13基 2基 1基 1基 9基	弥生土器、土師器、黒色 土器、須恵器、石製品、 鉄製品	弥生時代中期後半から後 期初頭にかけての墳墓およ び祭祀土坑を検出すると ともに、甕棺と石棺の折衷形 態をとる墳墓を確認した。 当該期の墓制・祭祀行為を 考察する上で良好な資料を 得た。

要 約

調査地は三瀬町のほぼ中央に位置する標高約9mの微高地上に立地する。本調査は、隣地で確認された弥生時代等の遺構の分布状況を確認することを目的に実施した。結果、弥生時代の墳墓・祭祀土坑を中心とした良好な資料を得ることができた。弥生時代の墳墓は甕棺墓9基を主として、土壇墓1基、石蓋土壇墓1基を確認し、中期後半から後期初頭の所産である。これらの墓域に接して同時期の祭祀土坑を検出し、家族墓的規模の祭祀が行われたと推定される。また、墳墓の中には甕棺と石棺の折衷形態を採用したものが出土しており、当時の墓制を考察する上で注目される。その他、久留米市西部では希少な縄文時代前期の曽根式土器を採取するとともに、三瀬町内で初となる古代の遺構を確認できた。

土木工事の届出日	令和3年8月31日	遺物の発見通知日	令和4年1月24日 (3文財第2757号)
----------	-----------	----------	--------------------------

早 津 崎 五 反 田 遺 跡

— 第1次発掘調査報告 —

久留米市文化財調査報告書 第445集

令和5年3月31日

発 行 久留米市教育委員会

編 集 久留米市 市民文化部 文化財保護課

印 刷 香和印刷株式会社